遊牧と交易を生業とする「ネットワークする力の文明」であり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教を生み出した。

「石の文明」は、岩盤上の薄い土壌の上で牧畜を生業として発達し、衰退とともに次々に根拠地を移していったヨーロッパの「外へ進出する文明」である。

現在、ヨーロッパと北アメリカでは徹底した土壌保全事業と手厚い農業農民保護政策によって農耕地の劣化をくいとめている。

共生理念を生む泥

「泥の文明」は、日本、東南アジア、インド東部を含む湿潤温暖なアジア・グリーンベルト圏に発達した定住の農耕文明であり、生命力にあふれた「泥」が「内に蓄積する力」を秘め、共生の理念に基づく社会を生みだした。

「泥の文明」においては主要な土地利用形態が水田農業であり、水田は土壌肥沃度の低下が非常に少ないので、ほぼ永続的な農業が行われている。

文明、文化の荒廃

このように、人間の文明と文化の基盤は土にあるが、それらは永遠不滅のものではないので、土が荒廃すればその上に立つ文明と文化も荒廃することになる。

及ぼしたのは褐色森林土・火山灰土文化（焼畑文化）と水田土文化である。

他方、松本健一氏によれば「文化」とは個々の民族の生きるかたちであり、「文明」は民族の違いを乗り越え、共通した風土と歴史のうえに普遍的に築きあげられる社会や生活のしくみのことをいう。

松本氏は、人間が生活している土地の成り立ちが文明の様式に著しい影響を及ぼしたとして砂の文明、石の文明、泥の文明が区別されると述べている（「砂の文明・石の文明・泥の文明」PHP新書2003）。

「砂の文明」は、砂漠地帯に発達した非定住で